平成25年度　鷗友学園女子中学校（国語）　解答・解説

解答

一

問一　モコが逃げ出してしまい、さがしても見つからないので、これからどうしたらよいかわからなくなっている様子。

問二　龍安寺の小屋にモコがいるかもしれないと思っていたのに、そこにもいないので、がっかりしている。

問三　おばさんは、おばあさんの言った言葉を、養護施設で出会った康太が自分たちの子どもになる子だと都合良く考えた。

問四　康太はもう自分で考えることができると思うようになったため、実の母親に康太を会わせることを覚悟した。

問五　康太は、本当の母親に会うことで自分の心がどう変わってしまうか心配だった。しかし、そうした不安から逃げずに立ち向かうことで、会ったことはまちがいではなかったと感じ、はればれとした気持ちになっている。

二

問一　一般のコメは価格が安く、農家が稲作だけで暮らせず、若者の農業離れが進んだこと。

問二　むかしは生きることと食べることがつながっており、コメの豊作を喜んだが、いまは豊作でもコメが余ってしまうと米の価格が下落して、単純に喜べないということ。

問三　放射能に汚染された土や海は、わたしたちのからだの一部だと感じるように、わたしたちがほんとうに生きるために必要なことは、人間は自然との間にもつながりがあるということを想像することである。

三

(1)　警笛　(2)　目方　(3)　系統　(4)　列挙　(5)　干満

解説

一

出典は、まはら三桃「鷹のように帆をあげて」。

問二　モコをさがしていた理央は、「モコの第二の家」（32行め）である龍安寺に向かいます。そこで、「コンクリートの小屋をのぞきこんだ」（35行め）ところ、「空っぽ」（6行め）だった、つまりモコがいなかったので、がっかりしてしまったのです。

問三　おばあさんは、なかなか子どものできないおばさんに、「あなたがたの子どもは、もう生まれとらっしゃるかもしらん」（82行め）と言います。それからしばらくたって、おばさんは養護施設の手伝いをするようになり、そこで出会った康太のことをかわいいと思い、「この子がおばあさんの言うとられた、うちの子やないか」と感じます。康太が「自分たちの子どもになる子」だと都合良く考えたわけです。

問四　おばさんは、康太の本当の母親から「人目でよかけん（康太に）会いたい」（59行め）と言われていましたが、そのことを康太にずっと言えないでいました。「本当のお母さんに会ってしまったら、あの子はあっちに帰りたくなるんやないか」（62・63行め）と思ったからです。しかし、康太が偶然、本当の母親の入院先である武雄に行くことになり、「向こうでなんか思い出すかもしれん」（124行め）と思う一方、「康太の大事なことやけん、自分で考えさせんと」（71行め）と覚悟します。それは、「自分で出した答えがいちばんよかこと」（71行め）、「もう康太にはそれだけの力がある」（71・72行め）と思いいたったからです。

問五　康太にとって「風に向かって飛」ぶとはどのようなことか、また、そうすることによって「すっきりした」ことはどのようなことかをおさえます。康太は、悩んだ（135・136行め）結果、「自分を産んだ人に会ってみる」（140行め）ことを決心します。「会ってどんな気持ちになるかわからんけど、逃げとったってしょうがない」（140・141行め）と考えたからです。本当の母親に会うと決めたことは、康太にとって、一大決心だったわけです。本当の母親のもとから帰ってきた康太は、おでんがつくってあると聞いてはしゃいだり、理央に嫌味を言ったりと、「いつもの康太」（182行め）でした。このような康太のようすから、「本当のお母さんに会ってきたのは、まちがいではなかった」（200・201行め）と、はればれした気持ちになっていることがわかります。

二

出典は、山内明美「こども東北学」。

問一　7～11行めの内容から、一般にスーパーなどで流通しているコメの価格が安いことがわかります。そのため、「稲作だけで暮らしていくのはどう考えてもむずかし」（11・12行め）く、「若い人たちも農業から離脱して都市へ働きに出た」（13行め）のです。このような現実を、筆者は「過酷だ」と表現しています。

問三　「汚染された土や海は、ひょっとすると、わたしたちのからだの一部」（37行め）であり、「いま起きている土と海の汚染が、自分のからだの一部で起こっている」（40・41行め）と、筆者は考えています。くわえて、「たぶん一生、この国で生きている限り、この汚染と向き合うことになる」（43行め）わたしたちにとって、「自分のからだとつながっているはずの世界のことを想像してみることは大事なことだ」（52・53行め）と結んでいます。